

マリア・マリブランを経たバルトリの芸術

中 東生

2006年3月に13年ぶり2回目の来日を果たしたバルトリが、「また13年も待てないので（笑）、今までの分を取り返すためにも」と、2年半後の来日計画を練り始めたのは、彼女がヨーロッパに戻って来て間もなくだったと思う。しかし、その2年半の間にバルトリの芸術には、大きな転機が訪れることになる。

2007年9月11日ルッカの街を皮切りに、バルトリのコンサートツアーが始まった。その名はマリブランの『マリア』。19世紀ロマン主義のミューズとして君臨した夭折のメゾソプラノ、マリア・マリブランの生誕200周年をひかえ、彼女の芸術を、様々な資料を参考に再現しようとする試みだった。ツアーはマリブラン移動博物館と呼ばれた大型バス付きで行われ、バルトリが収集したマリブランの所有品が展示されている。コンサートと共に、当時の雰囲気にも触れてほしいという彼女の願いを乗せてヨーロッパの8カ国17の街を回った総走行距離は1万6千キロとなり、のべ5万人を超える入場者が常に列を作っていたという。今年の3月24日



2007年9月 イタリア・ルッカにて。マリア・マリブランの遺品のコレクションを乗せ、ヨーロッパ各地をまわった“移動博物館”の前で。
©Cecilia Bartoli-Music Foundation / Beatrice Speranza

にマリブラン200歳の誕生日をパリで祝うため、朝、昼、晩と音楽会を企画して「マラソンのような」1日を終えた後、移動博物館は、最後にスカラ座で26日に公開された。現在は残念ながら閉鎖されているが、「機会があれば日本まででも持って行ける」とバルトリは常に意欲的だ。

バルトリがマリブランに興味を持ち始めた最初のきっかけは、今回のプログラムでもアリアを披露する《セビーリヤの理髪師》にデビューする時、レコードプロデューサーのクリストファー・レーバーン氏にプレゼントされた肖像だったという。ロンドンでロジーナ役デビューを果たし大成功を収めたマリブランの肖像をお守りとしてくれたのだった。そのうちマリブランに関するコレクションが集まってくると、人物、芸術にも興味を持ち始めたそうだ。そして不思議な相似点が浮き上がって来る。まずは両親が音楽家という恵まれた環境に生を受け、ソプラノの母とテノールの父の遺伝子のお陰なのか、高音に強いメゾソプラノという声質はマリブランのそれを彷彿させる。最初にオペラの舞台上で歌ったのもなんと同じ8歳の時に子役としてであり、成人してからもほぼ同じ年で、同じオペラ《セビーリヤの理髪師》でデビューしている。キャリアの初めはモーツァルトとロッシーニで築き上げ、その後バロック音楽におけるカストラートの領域も制覇し、若いうちからアメリカに渡ったという偶然など、共通点が次々に浮かび上がるうち、録音手段のなかった時代のマリブランの声を再現したいというバルトリの挑戦が始まったのである。

手紙や資料を紐解いて研究を重ねた結果、19世紀初頭のメゾソプラノの音色が理解できるようになったという。今ではソプラノによって歌われているベルカント・オペラのヒロインが、実はメゾソプラノに捧げて書かれていたという事実は知られてはいるが、それを実際に再現することは耳に心地よいショックであったという。《夢遊病の娘》のアミーナやノルマなど、当時の発声技術を持つメゾソプラノによって歌われると、別の柔らかさが表現され、なんと独特のメランコリーが生まれてくることか、とバルトリ自身も驚いていた。今年のバーデン・バーデン音楽祭で《夢遊病の娘》の舞台デビューを果たしたが、ファン・ディエゴ・フローレスと録音した《夢遊病の娘》の全曲版CDは、DECCAから10月に発売される予定だという。マリブラン自身の手描きの譜面などの資料を元に、当時のヴァリエーションが再現されている。マリブランとの出会いのお陰で、後世の慣習から解き放たれて、作曲家が意図していた真の《夢遊病の娘》を再発見することができたのである。

その他にもバルトリの発掘は続く。マリブランの死後、現在まで忘れられていたというアレ

ヴィのオペラ《クラリー》の楽譜をバルトリ自身がパリの図書館で見つけ、次期の年間プログラムの記者会見直前に、チューリヒ歌劇場支配人のペレイラ氏に頼み込んで、やっと上演にこぎつけたのは今年の5月。そこで題名役を歌っているバルトリの声は、今までとは違う響きがあったが、インタビューでその謎が明らかになった。「この音域の広い役を歌いこなすには、独特の発声が必要でした。ロッシーニで言えば《チェネントラ》に例えられると思います。1幕の声、それ以降の声、と変化していき、最後の Rond では高音を確実に自分の物にしていなければ歌えないからです。その秘訣を探り当てた時、マリブラン特有の弾力性を身につけることができたと思います」と語ってくれたからである。

作曲者のアレヴィは現在《ユダヤの女》の1作品でのみ名が残っているが、彼が誰の真似をもせず、正真正銘のベルカント手法で、その7年前にこの作品を書いていたということが興味深いという。後期ロマン派の手法で書かれた悲劇《ユダヤの女》で有名な作曲家が、実はこれほど異なるスタイルにも精通していて、コミカルな才能もあったということは、《クラリー》が埋もれている限り、誰にも知られずに過ぎてしまっていたのだから。ロッシーニで言えば、《ウィリアム・テル》と《ブルスキーノ氏》を比較するのは不可能で、その両方を知ってのみ、ロッシーニの懐の深さが分るというようなものである。このオペラは再び、世界の歌劇場のレパートリーに返り咲くべき作品だとバルトリは確信している。

来日プログラム『ロッシーニの夕べ』がルツェルン・フェスティバルの一環として取り上げられ、「マリブランのお陰で、メンデルスゾーン、ペルシアーニ、パチーニなど19世紀の作曲家を知ることができ、本当の意味でのベルカント・レパートリーが自分の物になった」と語るバルトリの言葉を実体験する機会に恵まれた。このプログラムは1年間共に歩んで来たマリブランが最高の表現者として評価されていたロッシーニの世界に捧げるコンサートという意味合いを持つと彼女は語る。スイスのフランス語圏にあるマルティニーでも成功を収めたいが、実際に体験すると想像以上の凄さだった。超満員のルツェルン文化・会場センターに入りきらない聴衆が舞台上に60人も座っていた。それでも、バルトリの親戚すら、公演1か月以上前にすでにチケットが取れない騒ぎだったそうだ。始まってみると、最初はやはり声の小ささに再度驚かされる。まるで天へ昇っていくクモの糸のようだ。それが、精緻な織物を織り上げていくのである。詳しく触れてしまうと楽しみを奪ってしまうことになるので我慢しておくが、ベッリーニの1曲目ですでにノックアウトされるであろうとだけ言わせてほしい。現在ここまでベッリーニ歌曲を極められる人物はいないのではないか。以前から完成度の高い芸術ではあったが、マリブランを経たバルトリは今や、ベルカント歌曲の女王と言っても過言ではないだろう。

彼女がもともと持っていたレガートの力が、ベルカントスタイルに磨き上げられ、声にはベルカントが与えるきらめきが加わった。暗めの音色でしっとり歌ったり、超ピアノの連続のまま、ささやくように、愛撫するように、6曲すべて異なる色で歌い分けるベリーニ歌曲だけで、もうコンサート全体を聴いたような満足感に満ちあふれた。これ以上盛り上げるのは不可能だろう、後半はどうするのだろう、という不安などは杞憂に終わり、思わず笑ってしまうようなアイデアを伴いながら、立派にクライマックスに到達するのだ。そんな旬のプログラムを日本にいながらにして聴けるというのだから、こんな幸運はない。

バルトリ曰く、「日本の聴衆からは、一緒にコンサートを創り上げようという意欲が感じられるから毎年でも日本へ行きたい」「日本でバロック・オペラもやってみたい」などの言葉からも、遠い極東の国だった日本が確実に彼女の身近な存在になってきていることが伺える。とどまることを知らない彼女の芸術の“今”がきっと皆様の記憶に深く刻み込まれ、バルトリと感動体験を共有できることと確信している。

(なかしのぶ 音楽ライター)



[11月7日、9日 前半プログラム]

Rossini : La Regata Veneziana
(Tre canzonette in dialetto veneziano)

I Anzoleta avanti la regata

Là su la machina xe la bandiera,
varda, la vedistu, vala a ciapar.
Co quela tornime in qua sta sera,
o pur a sconderte ti pol andar.

In pope, Momolo, no te incantar.

Va voga d'anema la gondoleta,
né el primo premio te pol mancar.
Va là, recordite la to Anzoleta
che da sto pergolo te sta a vardar.

In pope, Momolo, no te incantar.

In pope, Momolo, cori a svolar!

II Anzoleta co passa la regata

I xe qua, i xe qua, vardeli, vardeli,
povereti i ghe da drento,
ah contrario tira el vento,
i gha l'acqua in so favor.

El mio Momolo dov'elo?
ah lo vedo, el xe secondo.
Ah! che smania! me confondo,
a tremar me sento el cuor.

Su, coraggio, voga, voga,
prima d'esser al paletto
se ti voghi, ghe scometo,
tutti indrio lassarà.

Caro, par che el svola,
el li magna tuti quanti
meza barca l'è andà avanti,
ah capisso, el m'a vardà.

ロッシーニ：ヴェネツィアの競漕
(ヴェネツィア方言の三つのカンツォネッタ)

I 競漕前のアンゾレータ

ほら、旗はあそこの表彰台の上よ、
ねっ、見えるでしょ、あれをめざすのよ。
夕方にはあれを持ってきてね、
さもないと人前に出られなくてよ。

舟に乗ったら、モモロ、ぐずぐずしてちゃ駄目よ。

懸命に漕ぐのよ、ゴンドラを、
そしたら一等だって取れなかないわ。
さあ、行くのよ、アンゾレータのことを忘れないで、
この蔓棚のところで見てますからね。

舟に乗ったら、モモロ、ぐずぐずしてちゃ駄目よ。

舟に乗ったら、モモロ、走るのよ、飛ぶように速く!

II 競漕中のアンゾレータ

みんな、こっちへ来るわ、見て、見て、
何てこと、みんな一線上だわ、
ああ、風が逆向きよ、
でも潮は具合よさそうね。

あたしのモモロは、どこ?
あっ、見えたわ、二番手よ。
ああ! 心配だわ、どうしたらいいの、
心臓がどきどきするわ。

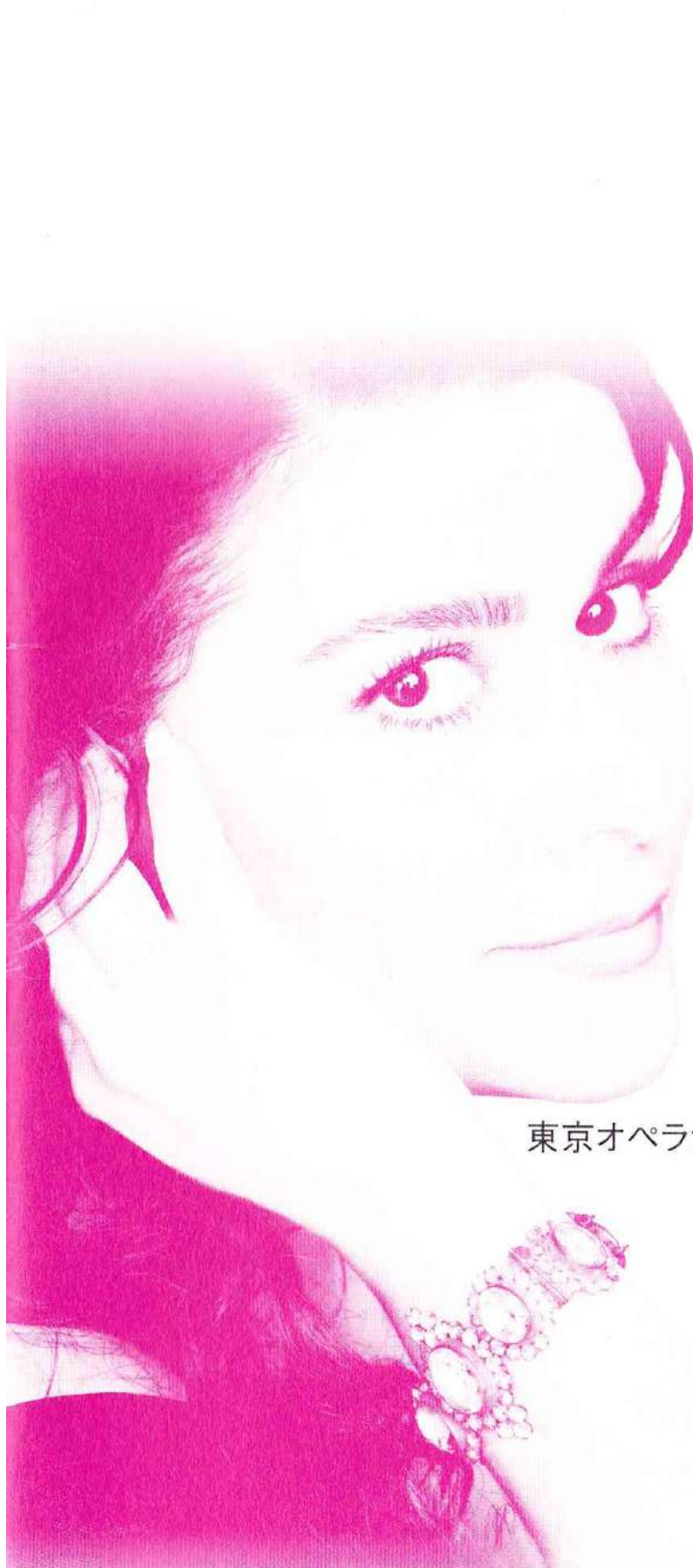
さあ、頑張っ、漕いで、漕いで、
きっとゴールで一番になるのよ、
このまま漕げば、きっとそうよ、
みんなを置いてきぼりにできるわ。

何てすてき、あの人、飛んでるみたい、
誰も彼も追い抜いて
半挺身だけ先に出たわ。

あっ、判った、あの人、あたしを見たからよ。

 日本生命
NISSAY

NTT都市開発



チェチーリア・バルトリ
リサイタル

Cecilia Bartoli Recital

2008年11月7日[金] 19:00開演

2008年11月9日[日] 16:00開演

東京オペラシティ コンサートホール: 夕ヶミツ メモリアル

主催: 東京オペラシティ文化財団

協賛: 日本生命保険相互会社 / NTT都市開発株式会社

制作協力: IMXクラシックス&アーツ

TOKYO
OPERA
CITY